



特集

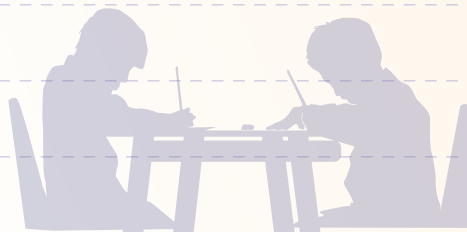
「統一合判」

中学入試レポート vol. **4**

これが合格への カギになる！

2017年入試の変化のもとで、 チャンスを生かす受験校の選び方

9月以降、夏休みを終えて、6年生が本格的な入試対策に取り組み始めてから、すでにひと月半。来年2月の入試本番まで残り約3ヵ月半となった。保護者の皆さんも、いよいよ併願校を含めて、受験校を決めていく時期にさしかかっている。年ごとに多くなる入試要項変更によって、“激動”が恒常化してきた中学入試だが、来春2017年入試はどうなるのか。目立った動きを確かめてみるとともに、そこで生まれるチャンスを生かす、受験校の選び方を探ってみよう。



首都圏模試センター

大学入試と日本の教育が変わる節目に 私立中学校の入試が多様化！

毎年、多くの入試改革が行われることで目まぐるしく人気動向が変わってくる首都圏中学入試。例年、前年入試の直後から、次年度に向けての入試変更が次々と公表され、それぞれの学校の志望者数や難易度の変化、全体的な人気動向の変化などが、その翌年入試に関する話題となっていく。

来春2017年の首都圏中学入試には、2015年入試の2月1日「サンデーショック」や、その反動にあたる翌2016年の「揺り戻し」の影響、同じく2016年入試の「桐朋が2回目入試を新設」など、入試全体や難関校の人気動向に影響を及ぼすような、大きなトピックは存在しない。しいて言えば、神奈川で横浜市立サイエンスフロンティア高等学校が来春2017年から中学を新設し、神奈川では5校目（横浜市では2校目）の公立中高一貫校として、小学生の進路の選択肢に加わることが、首都圏中学入試の最大のニュースだろう。同校と同じ横浜～鶴見の臨海エリアにある浅野をはじめ、近接する私立中学校への影響は確かに予想される。

しかし、それ以上の、いわば“地殻変動”を呼び起こすような、沸々とした動きが各校で出現している。そのひとつが、来春入試ではついに神奈川・千葉・埼玉エリアまで広がった「私立中入試の多様化」の動きだ。

2005年からこの2016年までに、首都圏（ここでは東京・神奈川・千葉・埼玉・茨城）に設立された公立中高一貫校は23校（東京11校・神奈川4校・千葉3校・埼玉2校・茨城3校）になっている。これに来春から横浜市立サイエンスフロンティアが附属中学を開校。続いて2019年からはさいたま市立大宮西高等学校が中学を開校して中等教育学校となり、新たな公立中高一貫校の選択肢に加わる。

この「私立中入試の多様化」は、当初はこれら（主に東京都内の）公立中高一貫校の、いわば「力試し受験」の場として新設された「適性検査型入試」

が始まりであったが、2015年からは東京都内だけでなく、神奈川・千葉・埼玉の私学にも、この「適性検査型入試」新設の動きが広がった。現在ではその入試名称も、「思考力入試」「PISA型入試」「総合型入試」など多岐にわたり、すでに今春2016年入試では、86校もの私立中学校が、こうした「適性検査型（思考力型・総合型・PISA型）入試」を実施しているのが現状だ。このほか、帰国生入試では以前から行われてきた「英語（選択）入試」が、一般入試にも導入され始め、2015年には首都圏で33校、2016年には56校が、一般入試での「英語（選択）入試」を実施した。

続いて来春2017年入試では、さらに30数校の私立中学校が、こうした「適性検査型（思考力型・総合型・PISA型）入試」を新設し、その数は110校近くになろうとしている。「英語（選択）入試」の実施校も、市川中などの人気校も加え、70校に近づいている。

振り返ると、今春2016年入試の時期には、多くのマスコミが、多様化する新たな形態の私立中入試で問われる「思考力」「表現力」「総合力」と「英語力」にスポットを当てた。

そうしたマスコミ報道が多出した背景には、「2020年大学入試改革」や、文科省が推進する「アクティブラーニング導入」に象徴される日本の教育の変化がある。それらを契機に「中学入試が変わり始めた」ことに多くの注目が集まった。



来春2017年から1月20日の幕張メッセ入試に「英語＋2科」選択入試を導入する市川中。



2020年からの「大学入試改革」が、 日本の教育・学校・学力・入試観を変える！

そうした「私立中入試の多様化」は、小学生と保護者から見れば「中学入試の間口が広がった」ということであり、多様な受験準備のスタイルを経てきた子どもたちが持つ、多彩な能力や意欲、資質を評価し、私立中高一貫校の教育に「迎え入れて」くれようとするものだ。

こうした新たな入試が、子どもたちの多彩な才能や将来伸びる可能性を見出し、そこに光を当ててくれるものであるならば、それは多くの保護者にとって、歓迎されるべきものだろう。

いまから4年後の2020年から「大学入試が変わり」、「日本の教育が変わる」節目を前に、その方向性を先取りした私立中高一貫校の先見性が「中学入試も変わる」という、大きなムーブメントを起こし始めたと見ることもできる。その意味でも、来春入試に向けての「私立中入試の多様化」の動きは、従来の「4科目」「2科目」入試だけを実施している（多くの）難関校を志望する受験生と保護者も、やはり意識しておくべきだろう。

たとえば8月末には、奈良エリアの最難関校のひとつで、東大・京大という国公立の最難関大学にも多くの合格実績をあげている西大和学園（奈良県北葛城郡・共学校）が、来春2017年の中学入試から「21世紀型特色入試」（専願入試）という新たな入試の導入を公表した。こうした動きは、おそらく近畿圏の私立中学校では初めてのことだ。

西大和学園は、全国中学入試の最難関・難と併願をする受験生も多く、毎年1月には東京入試も実施するため首都圏の受験生にもよく知られている。

そうした全国的な難関校が、こうした「新たな入試形態」の導入に踏み切ったことは、おそらく今後の関西・西日本の中学入試にも大きな影響を及ぼすことになる。これもまさしく「大学入試が変わり」「日本の教育が変わる」ことを先取りした動きであり、同校がそれに対応した教育と入試を行っ



来春2017年から1月14日に「21世紀型特色入試」を新設して注目される奈良県の難関進学校・西大和学園

ていくという強烈なメッセージでもある。

そうした変化と新たな動きにつながった「2020年大学入試改革」や、学校教育現場への「アクティブラーニング導入」をめざす今回の教育改革・入試改革の方向性は、むしろ現在の若い世代の保護者からは歓迎されているといえるだろう。

明治期に導入された（先進諸国に追いつくための）近代の学校教育制度や、戦後の経済復興～発展のために構築された、欧米の知識・技術を取り入れるための、いわばキャッチアップ型の教育モデルでは、もはや今後の国際社会で立ち行かなくなってしまうという認識や、そこに綿々と受け継がれてきた従来型の「教育観・学力観・入試観」をリニューアルする必要があるという考え方は、むしろ現在～今後の中学受験生（小学生）の若い世代の保護者から支持されているといってもいい。

「変わる日本の教育」をリードする 私立中高一貫校の進化と変革

そしてわが国の教育の喫緊の課題とされる、①アクティブラーニングの導入、②グローバル教育（留学や教育環境の多様化＝ダイバーシティ化を含む）の充実、③「4技能（読む・書く・話す・聞く）」の力を高める英語教育の高度化、④ICT教育の導入、⑤「ディプロマ（出口）ポリシー」～「カリキュラム（中身）ポリシー」～「アドミッション（入試）ポリシー」の明確化、などについては、大学や公立中高の教育現場に先駆けて、多くの私立中高一

貫校が、積極的な取り組みや教育改革を進めている。この柔軟性と決断の素早さこそが、公立にはない私学ならではの強みでもある。

たとえば①の「アクティブラーニングの導入」に関しては、女子校からの共学化と校名変更を果たした2015年入試から3年続きで人気上昇を続ける三田国際学園（東京・世田谷区。旧・戸板）や開智日本橋学園（東京・台東区。旧・日本橋女学館）、さらには日本初の「ハイブリッドインターナショナルクラス」を導入した工学院大学附属（東京都八王子市・共学校）などが、私学の柔軟性・先見性を象徴している。これらの私学の人気上昇傾向、つまりそうした新しい教育スタイルへの保護者の期待と評価が、この1～2年の中学入試に新風を吹き込んできたことは間違いない。

そして②の「グローバル教育の充実」は、どの私学も「英語教育」の進化を図るとともに、急速にその工夫や新たなプログラムの導入を進めている。「IB（国際バカロレア）プログラム」の研究や教員研修を進めている海城（東京・新宿区。男子校）や立教女学院（東京・杉並区。女子校）をはじめ、カナダと日本の両方の高校卒業資格が取れる「ダブルディプロマ」プログラムを導入した文化学園大学杉並（東京・杉並区。女子校）、そして「IB導入」の先進校である玉川学園（東京・町田市。共学校）、新たに埼玉では初の「IB-MYP（ミドルイヤーズプログラム）」の候補校となった昌平（埼玉・北葛飾郡。共学校）など、いわゆる“世界標準の”教育をめざして進化を図る私学も急速に増えている。



今春2016年入試では例年以上に大きな人気を集めた工学院大学附属・新宿キャンパスからのスクールバスも開通している。

文科省の「トビタテ！留学JAPAN」プロジェクトの奨学金制度や、東京都による留学助成金制度などを活用して、これまで以上に多くの在校生を海外留学に送り出している私学も増え、一方で留学とは逆に、アメリカの大学生スタッフが来日して、高校生と数日さまざまなテーマで英語での対話を重ねてくれる「エンパワーメント・プログラム」など、国内でもグローバルな体験ができるプログラムを導入する私学（成城や立教女学院など）がいくつか現れている。

また、海外帰国生の受け入れを拡大し、在校生に占める帰国生の割合を高めることで、多様なバックボーンを持つ生徒が共生できる教育環境（ダイバーシティ）を作ろうとしている私学も多い。

③の「英語の4技能」の力を高めることも、すでに「2020年大学入試改革」を待たずに、英検やGTEC-CBT、IELTS、TEAP、TOEFL-iBT、TOEICなど、英語の各種の民間検定を入試の判定に導入する大学も増えている（上智大、早稲田大、筑波大など多数）一方では次期「学習指導要領」が導入される2020年からは小学校でも英語が教科化されることもあり、すでに幼少時から英会話スクールに通う子どもの数は近年増え続けている。

そうしたなかで、明治期から日本の英語教育をリードしてきたミッション・スクールをはじめ、もともと英語教育には力を入れてきた私立中高一貫校は、よりいっそう自校の英語教育のプログラムを進化させ、この「英語の4技能」の力で、国内の難関国公立大学はもちろん、海外の大学にも積極的に生徒を送り出し始めている。フィリピン・セブ島などでのマン・ツー・マンでの短期英語研修や、PCやタブレットでインターネットを介して海外の英語講師と会話を交わすプログラムなどを導入する私学も増えている。

これまで、公立中学校の週3～4時間の英語の授業時数に比べて、平均でも週6～7時間の英語授業を行ってきた私立中高一貫校が、さらにその内容を工夫することで、大学入試はもとより、



社会に出てからの「使える英語」力を育てる教育環境として、いま私学は大きなアドバンテージを握ったといってもいい。

④の「ICT教育」の推進についても、昨年から今年にかけて、私立中高一貫校の多くが、積極的に力を入れ始め、教室への電子黒板や大型プロジェクトの導入や、校舎内全館無線LANの導入、教員と生徒一人に1台のタブレットやPCの導入など、ICT教育の環境整備を推し進めている。

そうした変化のもとで、まず意欲的な教員がICTを使った授業の工夫を図り、その手ごたえや成果を、他の教員にもシェアすることで、そうしたスタイルの授業が波及的に学内に広がるといって、良い意味での循環をすでに生み出している。

私学のなかでも「ICT先進校」と評価されてきた桜丘や広尾学園はもちろん、昨年6月に中学棟が新築され、キャンパスのリニューアルを終えた桐朋（東京・国立市。男子校）では、最新のICT教育環境を整え、同校独自の「次の学びプロジェクト」を始動。男子の有名進学校のなかでも先進的なICT教育に取り組んでいる。同じく男子進学校の海城、城北（東京・板橋区）、巣鴨（東京・豊島区）や、共学校の市川（千葉・市川市）でも、すでに最新のICT教育環境を整えている。

もともと①の「アクティブラーニングの導入」のためにも、生徒個々の意見や考えなどの情報を一瞬で教室内の全員にシェア～共有できる道具として、このICT機器は非常に便利なものであり、

「2020年大学入試改革」では「CBT方式（PCやタブレットで解答させる）」を前提として作成されるという「高等学校基礎学力テスト」と「大学入学希望者学力評価テスト」という、現在の「大学入試センター試験」に代わる新たな2種類の共通テストでも、これらの機器の活用は現在の子どもたちにとっての大きな課題とされている。

そして⑤の「ディプロマポリシー」～「カリキュラムポリシー」～「アドミッションポリシー」の明確化は、来たる「2020年大学入試改革」にあたり、文科省から全国の大学が課された課題だ。卒業生のほとんどが大学進学を希望する私立中高一貫校では、その大学入試と大学教育の変化に対応するものとして、自らの中高6年間一貫教育の「出口～中身～入口」のコンセプトを明確化しようとしている。それが、このレポートで述べてきた「私立中入試の多様化」の動きにつながったということだろう。

変わる大学入試、3年目の当事者にあたる現小6生の保護者の学校選択のポイント

こうして、いま日本の私立中高一貫校は、創立時から受け継がれてきた教育理念や、長い歴史のなかで形作られてきた校風・カラー、男子校・女子校・共学校としての魅力はもちろん、大学付属校・進学校、そして両方の側面を併せ持つ半付属（半進学）校といったタイプの違いなど、私立中高一貫校の独自の個性や魅力に加えて、一方では「新たな時代に求められる力を育てる、新たな教育スタイルや“世界基準の”教育プログラム」を積極的に導入し、子どもたちが生きる将来の時代の要請に応えるべく進化を重ねつつある。

だからこそ、来春2017年以降に小学校を卒業し、中学入試に挑んでいく小学生と保護者には、それらの私立中高一貫校の「変わらない魅力」と「変わる進化の方向性」を、しっかりと見定めていただきたいのだ。



この夏に全教室に大型モニターと全館無線LANの環境を整え、やがては生徒一人1台の活用を図っている城北。

激動の2017年入試で“合格”を得るために、模試を上手に利用しよう！ ～「継続して受ける」ことで学力を育て、自信をつけることができる！～

首都圏模試センターの「小6統一合判」テストも、この10月10日で第4回を迎えた。6年生では12月までに残り2回、計6回の模試が行われるが、この機会を十分に活用して、来春2017年入試での“合格”のステップにしていただきたい。こうした模試の上手な利用法は、何より「継続して受ける」ことだ。

それによって、

①毎回の成績の推移と、受験生のなかでの自分の位置を知り、受験勉強の成果（手ごたえ）を確かめることができる。

②志望校の最新の入試情報と人気動向を知り、ベストの受験（併願）作戦を組み立てていくことができる。

③毎回のテストで力試しができると同時に、中学入試の“合格”に直結する実戦的な学力を育てることができる。

といった、いくつものメリットが得られる。そのためにも、毎回のテストでは、成績表や結果判定などのアウトプット資料をよく確かめ、試験問題や答案には何度も目を通して、しっかりと「おさらい」しておく必要がある。

また、最近の小学生の皆さんは、まだまだこういった長時間のテストを緊張感のある状態で受けることに慣れていない。これまでもお通りの塾での内部テストは何度も受けてきたと思うが、会場が変わって、周囲に初めて顔をあわせる子どもたちがいるなかでの（＝入試本番のような）テストには、また違った緊張感がある。こうした雰囲気のできるだけ早く慣れて、入試の本番でも感じるような、この緊張感



今年4月の「統一合判」模試では、聖学院会場に隣接したキャンパスのホールで、姉妹校として説明会を開催してくれた女子聖学院。

も味方につけて、十分に力を発揮できるようになっておきたい。

保護者の皆さんは、毎回の成績や志望校判定に一喜一憂するのではなく、客観的に結果を受け止め、それをプラスに生かすための工夫をしてほしい。どのような結果（成績）であったとしても、その都度お子さんを励まし、学力的に成長するための材料にすることを心がけていただきたいのだ。

また、テスト会場での説明会など、最新の入試情報が聴ける機会には、必ず参加して説明を聴いておくべきだろう。

こうして親子で上手に模試を利用することができれば、継続して受けることがやがてお子さんの自信にもつながり、来たる2017年入試での“合格”への、力強いステップになるに違いない。

実際には、新たな大学入試制度の導入初年度にあたる2020年には、本格的な「新テスト」制度（システム）の完成や、当初からめざされた「CBT方式」の出題や、記述問題の「AI（人工知能による）採点」の導入は、もう少し先になる見通しだ。

それでも、導入から3年目にあたる現在の小学校6年生の大学受験時には、先の英語の民間検定の導入をはじめ、「大学入学希望者学力評価テスト」での「思考力・判断力・表現力」を問う「PISA型」の出題などは通例になっていることが予想できる。その意味では、現在の小6以下のお子さんたちは、

まさにそうした「新たな大学入試」の本格的な当事者になる。

だからこそ「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってきた。そうした変化のもとで、それぞれの私立中高一貫校が、その変化をどう読み解き、将来の時代の要請をどう受け止めて進化していくのか、それをしっかりと見定めることが、お子さんにとっての「より良い学校選び」と「価値ある合格」へのカギになるのだ。



模試を受けることで、第一志望への課題と、ベストの併願作戦を組み立てるヒントを探ろう！

～「継続して受ける」ことで、合格へのチャンスが見えてくる！～

翌年の中学入試に挑む6年生が、模試を受けることで得られるメリットは、前のページのコラムで述べた通りだ。さらにこれを、親の立場で生かすべきことにしぼって、以下にポイントをまとめてみよう。

●第1志望校との距離を測り、課題を見つける

毎回の合格判定の結果や成績をもとに、お子さんの第1志望校の合格の目安（＝入試予想難度）と、現時点での成績とを考え合わせて、その学校への合格可能性や、そこまでの距離を測り、残された時間で何を重要課題として、親子それぞれが何をすべきかを検討する

同時に、11月以降の模試の結果が出る頃には「受験する学校を確定する」気持ちで、併願校選びのための情報収集や検討を進めておく。

●豊富な経験を生かしたアドバイスを聞く

毎回の模試の会場では、入試に関するアドバイスを伝える、保護者向けの説明会（講演）が行われていることが多い。そこでは、中学入試に関する豊富な知識と、長く受験指導に関わってきた経験・事例をもつ講演者から、入試本番に向けての準備や、入試に挑むうえで役に立つ話を聞くことができる。

また、単なる情報だけではなく、わが子のサポートをするうえでの迷いや悩みをもつ保護者を励まし、力づけてくれるような話も聞ける。そうした機会には、積極的に足を運んで、入試に立ち向かう勇気や元気をもらうことができるといいだろう。

●志望動向の変化による予想・分析を生かす

毎回の合格判定では、その月の志望動向（志望者数や成績分布）などをもとに、入試予想が立てられ、それが翌月の合格判定に生かされる。

そうした志望者数の数字やデータは、個々の成績表（アウトプット）にも反映される。それぞれの志望校の動向は、個々の成績表を見ることでわかるが、もうひとつ、全体状況のなかで、それぞれの動向がどうなっていくかという予測・分析については、やはり専門家の意見を聞いたり、配布された詳細な資料を見ることが必要になる。それまでは気がつかなかった視点や、見落とししていた情報を提供してくれることも多いはず。

この時期までに、おそらくほとんどの家庭では、



模試を受けるメリットは、多くの受験生のなかでの相対的な位置を知り、自分の目標への距離と課題を確かめることができることだ。

わが子の第1志望校、第2志望校については、詳細な情報を集めて、その学校についての理解を深めていることだろう。しかし、第3志望以下の併願校については、まだ十分な情報収集ができていないとはいえないのではないだろうか。

そうした併願校選びに際しては、これまで持っていた知識や視点での見方だけではなく、新たな知識や視点に気づかせてくれる専門家の意見が役に立つことが多い。たとえば、それまではわが子に午後入試を受験させることを考えていなかった保護者が、模試でのアドバイスを聞いたことによって、そのメリットや意味を知って、入試後になってみると「午後を受けておいてよかった…」と思えることも多いのだ。

●併願校を選ぶ多様な視点と最新情報を生かす

上に述べたことは、入試状況を知るためだけではなく、それぞれの学校を、もっとよく知るためにも大切な。

とくに併願校を選んでいく際には、ややもすると、古い情報や評判にとらわれて、選択の幅が狭くなりがちなこと事実。数年前までは、まだ成果の出ていなかった私学が、急速な変化・発展を遂げて、最近になって目覚ましい成果や実績を上げ、今後が大いに期待できる学校になっているケースは多い。

最新の学校情報によって、そうしたことに気づかせてくれるのも、模試を受けることで得られる大きなメリットといえるだろう。その意味では、会場での保護者向けの説明会（講演）や配布資料に、しっかりと耳を傾け、目を通していただくことが望ましいと強調しておきたい。

2017年入試に向けて、さらに多様化する私立中入試の人気動向

この1～2年の間に急速に増加した「私立中の多様な形態入試」は、来春2017年入試に向けても、さらに増加に拍車がかかっている。ここでは、来春入試から導入される、私学の新たな入試について、前回9月11日(日)に実施された、小6第3回「統一合判」での志望者数を抜粋してご紹介したい。

これらの新たな入試の新設・導入が公表されたのが6～7月のため、この9月段階では、受験生の保護者にはまだ十分に認知されていない。そのため、これから12月～来年1月にかけて、徐々に「公立中高一貫校と併願する受験生」や、受験勉強を始めるのが遅かった「駆け込み受験生」を中心とする志望者が増え、2月の入試本番では、予想以上の志願者を集めるケースが多い。

したがって、この9月時点ですでに2桁以上の志望者を集めている学校は、かなり人気が高まる可能性があると考えておくべきだろう。

●明大中野八王子や桐朋女子、清泉女学院や聖園女学院の新たな入試が人気を集める

適性検査型入試を新設する足立学園は、9月時点での志望者はまだ多くないが、今後増えることが予想される。

大妻中野の新思考力入試はすでに人気が高い。最近大いに話題となっている聖学院の思考力入試(思考力+計算力入試、思考力ものづくり入試)の人気増加は大いに注目される。桐朋女子の論理的思考力・発想力入試も人気を集めている。明大中野八王子のB方式(4科総合型)入試はすでに大人気。清泉女学院の2期(2科+英語1科)入試や聖園女学院の総合力テストも人気が高い。東邦大東邦が12月に新設した推薦(第一志望)入試には、かなりの成績優秀な受験生からの人気が集まっている。



今春入試では2月1日に総合型入試を独立させて人気を集め、来春は募集定員も約15名に増やす光塩女子学院

2017年入試で新たに導入される新形態入試 9月度小6「統一合判」志望者数(一部抜粋)

●=男子校 / ●=女子校 / ○=共学校

9月 予備 偏差値	学校(入試)名	性別	2017年 入試日	2016 9月度 志望者
44	● 足立学園(適性検査型)	男	2/1	7
54	○ 桜美林(総合学力評価)	男	2/1	13
55	○ 桜美林(総合学力評価)	女	2/1	17
50	● 大妻中野(新思考力)	女	2/4	32
51	● 大妻中野(グローバル②)	女	2/3	24
53	○ かえつ2/2思考力特待	男	2/2	6
53	○ かえつ2/2思考力特待	女	2/2	6
43	● 十文字(得意型特待)	女	2/4	18
43	● 女子聖学院(日本語表現力①)	女	2/2	5
43	● 女子聖学院(日本語表現力②)	女	2/4	1
41	● 聖学院②思考力入試	男	2/2	27
45	● 東京純心(タレント発見・発掘)	女	2/4	3
59	○ 東京都市大等々力(思考力)	男	2/4	8
59	○ 東京都市大等々力(思考力)	女	2/4	6
45	● 桐朋女子(論理的思考力・発想力)	女	2/2	41
55	○ 東洋大学京北「哲学」思考・表現力	男	2/4	5
55	○ 東洋大学京北「哲学」思考・表現力	女	2/4	5
57	○ 明治大中野八王子B(4科総合型)	男	2/5PM	77
57	○ 明治大中野八王子B(4科総合型)	女	2/5PM	64
46	● 八雲学園(未来発見)	女	2/2PM	19
42	● 和洋九段①グローバル	女	2/1	12
42	● 和洋九段②グローバル	女	2/1PM	12
42	● 和洋九段④グローバル	女	2/3PM	18
59	● カリタス(新3科型)	女	2/2PM	20
44	● 聖セシリア女子B(1科+読解・表現)	女	2/4	10
59	● 清泉女学院②(グローバルか2科)	女	2/1PM	96
41	● 聖和学院E	女	2/5	6
42	○ 鶴見大附(適性検査)	男	2/2	6
42	○ 鶴見大附(適性検査)	女	2/2	4
50	○ 桐蔭学園AL入試	男	2/4	10
50	○ 桐蔭学園AL入試	女	2/4	5
57	○ 桐蔭学園(理数AL)	女	2/4	1
54	○ 桐光学園③B(英語資格、T&M)	男	2/4	7
50	○ 桐光学園③B(英語資格、T&M)	女	2/4	1
50	● 聖園女学院(総合力テスト)	女	2/3PM	26
42	● 横浜富士見丘(未来力)	女	2/5	8
70	○ 市立横浜サイエンスフロンティア	男	2/3	72
70	○ 市立横浜サイエンスフロンティア	女	2/3	39
70	○ 市川(英語選択入試)	男	1/20	18
70	○ 市川(英語選択入試)	女	1/20	4
40	○ 昭和学院(マイプレゼンテーション)	男	1/21	2
69	○ 東邦大付東邦(推薦)	男	12/1	111
69	○ 東邦大付東邦(推薦)	女	12/1	95
43	● 大妻嵐山(みらい力)	女	1/10PM	7

※○印のかえつ有明、桐蔭学園は男女別学校